

論文要旨

【 学位論文題目 】 「踊ることによって生成される身体 ―その様相と構築過程―」

【 氏 名 】 岡 千春

【 要 旨 】

上演芸術である舞踊において、身体とは媒体であり、芸術家そのものでもある。こうした特徴により、舞踊における身体のあり方は、様々な視点から議論されうる問題である。しかし、今日の舞踊学研究では、舞踊における身体について語られる際、身体や身体の動きの見え方、あるいは踊られている振り付け（動き）そのものが議論の対象となりやすく、ダンサー個人の内面の問題と身体とのかかわりや、ダンサーの身体の変容という視点が重視されることは少ないと概観される。このことから、舞踊活動を継続しているダンサーの身体の特徴および変容について、ダンサー自身の言葉をもとに探る必要があると考えるに至った。

また、身体の変容からみたダンサーの発達論を考察するに当たり、筆者は東洋的心身論における身体の捉え方に着目した。「修行」における身体を東洋哲学的視点から論じた湯浅は、栄西の思想である「心身一如」の立場に立ち、身体的活動を精神的作用と切り離せないものとして論じている。筆者は、舞踊における身体も、「心身一如」という視点で論じられる必要があると考えた。ダンサーの身体と内的な意識作用の関連と、その発達過程を、「心身一如」の立場から考察することで、独自の発達理論を示すことができるのではないかと考えられる。

以上をふまえ、本研究においては、一定以上の舞踊経験に裏付けられたダンサーの身体を「舞踊する身体」とし、その身体の様相、およびその身体が構築されていくプロセスを、文献とダンサーの言の照合に基づいて明らかにすることを目的とし、考察を進めた。

第1章では、ダンサーが目指す舞踊する身体を「心身一如」的状态であると仮定し、舞踊活動における心身一如について東洋哲学の理論を手がかりに探ることとした。湯浅、西田らの論から、ダンサーは稽古を積むことで心身関係が変容し、上演時に行為的直観を体験することが明らかになったと言え、またそれは世阿弥が論じた「無心」状態と通じていることが示唆された。

さらに、世阿弥の論から、舞台上で踊るダンサーは、「我見」から離れた「離見」（客観的視点）のはたらきをもちうるということが明らかになった。そこから、ダンサーは「我見」と「離見」を総合的にはたらかせた「離見の見」の作用によって、鼎話的意識構造を有することが示唆された。

第2章においては、舞踊する身体がどのような過程を経て獲得されてゆくのかという問題に着目した。舞踊する身体に至るには、「修行」としての心身の訓練が必要であると考えられ、その過程は、身体技術の習得にとどまるのではなく、日常の心身のあり方へも作用すると言え、このよ

うな作用は、Parviainen の論じた *practice of the self* と通じていると考えられる。

そしてダンサーは、①「形」の模倣、②「型」の習得、③「離見」の獲得、④「離見の見」・鼎話的意識構造というプロセス（領域）をたどって舞踊する身体へ至ると考察された。

第3章では、5名のダンサーを対象として実施したインタビュー調査の結果を示した。PAC分析を用いた調査によって、ダンサーに意識される舞踊する身体は、①《表現性・伝達》、②《技術》、③《他者とのかかわり》、④《ダンサーの主体性》の4つの側面を有することが明らかになった。

また、舞踊の稽古においては、基礎的な身体訓練が継続的に行われ、上演経験や他者からの評価を得ることによって、ダンサーは稽古時の意識構造を変化させていくことが示唆された。

第4章では、第3章に示した調査結果を、第1、2章の論考をもとに考察した。舞踊する身体として最も重視される①《表現性・伝達》の側面には、行為的直観および場の理解が深く関わっていると考えられる。また、舞踊の訓練において②《技術》の習得は「形」の模倣に関連し、①《表現性・伝達》に向けて不可欠な要素ととらえられているが、技術の習得の先に④《主体性》の作用がなければ①《表現性》の表出には至らないと考察された。

さらに、第2章の考察をふまえると、ダンサーは、継続的に「形」の模倣を行いつつ、主体性の作用によって常に新たな「型」を獲得していくと言える。そして、稽古の際、他のダンサーや教師、振付家などとの関わりにおいて、「自他非分離的状态」を意識することで、「離見の見」の視点および鼎話的意識構造を構築していくことができると推察される。ここから、意識変化の契機となる上演経験を積み重ねていくことで、舞踊する身体の③《他者とのかかわり》の側面がより深まっていくという構造をみることができよう。

以上から、ダンサーは舞台上で行為的直観を体験し、心身一如の状態に至っていると考えられるが、その心身状態は、身体訓練を積んで得られるものと言うよりも、ダンサーが独自の舞踊観に基づく主体性をもって、かかわりとしての舞踊に従事することで至る境地であると考えられる。

本研究では、ダンサーのもつ身体の特徴および意識構造、またその稽古に求められる要素が明らかになったと言える。今後の舞踊研究において、ダンサーの身体感覚および意識構造を明らかにしていくことで、鑑賞者とダンサー双方の視点からとらえた、より包括的な理論の構築が期待できるであろう。さらに、踊ることによって生成される身体を、踊る側の熟達化という視点からとらえることで、舞踊そのものの教育的価値を明確化し、今後の舞踊教育研究に新たな知見を投げかけることができるのではないかと展望する。